

日本音楽の特徴や良さを探りながら、思考力・判断力・表現力を高め合う子ども

— 中学2年 「雅楽『越天楽』の鑑賞から表現へ」の実践から —

1 授業の構想

(1) 子どものとらえについて

本校は、ピアノなど音楽の習い事をしている生徒が3分の1以上いる。従って、音楽への興味・関心の高い生徒が多く、音楽の授業に対してもとても意欲的に取り組む姿が見られる。また、休み時間など音楽室に来て、友達とピアノを弾き合ったり、合唱曲を口ずさみながら廊下を歩いたりする生徒をよく見かける。毎年開催する校内音楽会への取り組みでは、ステージ上で誇らしげに歌声を披露する姿が見られる。さらにほとんどの生徒が、家庭ではiPodなどの機器を所有しており、邦楽、洋楽を問わずポップス系の音楽をほぼ毎日聴いて親しんでいる。しかしこのような現状の中、日本音楽に触れる機会はほとんどないといっても過言ではない。そこで我が国や郷土の伝統音楽を取り扱い、その特徴を理解させ、我が国の音楽文化の豊かさに気付かせ、尊重する心情を育てていくことは極めて大切なことである。

(2) 本単元の目標や内容と音楽科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本題材では、鑑賞の学習を通して感得した自分なりの自由な発想をさらに表現へと導いていきたい。既に小学6年で学習しているであろう今回の単元は、中学生では、曲想・楽譜上の構造などを探りながら、楽器の音色・素材に着目した上で日本音楽の特徴に迫りたい。さらに各グループで表現し合うことによって、独特な日本音楽を体感できることをねらいとしている。

音楽科では、思考力とは感じる・イメージする・理解する力であり、判断力とは選ぶ・工夫する力であり、表現力とは生かそうとする・生かす力と考えている。それぞれを積み上げていくことにより1つの音楽が生まれる。今回取りあげた「鑑賞」では、思考力と判断力がからみ合いながら、より豊かな表現をつくり上げ、結果的に、表現力も高まっていくと考える。その過程においては、鑑賞することによって感得した自分なりの自由な発想を大切に、生徒一人一人がイメージを膨らませ、自分なりの意味や意図をもって試行錯誤しながら表現を工夫し、音を音楽へ、一つの形あるものへと練り上げ、表現していけるようにすることが大切であると考えます。

さらに、友達との意見交換から新たな気付きが生まれ、聴き合う活動を通して、お互いの思いや意図を共有したり共感したりするなど、他の生徒とのかかわりも、思考力や判断力、表現力を育成するために大きな意味をもっている。

(3) 11年間で育てる思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本題材では、思考力・判断力・表現力を育てるための学び合う場面として、本単元の日本音楽の特徴について興味・関心をもって追求し、その特徴を体感することをねらいとして場面設定をしている。生徒たちは1年時、西洋音楽を鑑賞することによってイメージしたり、ストーリー化したりするなどイメージを膨らませ共有し合うにとどまっていたが、2年時では、日本音楽「雅楽」の独特な音色にふれることによって、日本音楽のイメージや特徴などを共有し合った音を実際にアルトリコーダーで追求させ、体感させた。また、なじみの薄い音色を自分たちで音づくりすることによって自然と日本音楽に親しんでいくことを期待した。教材は雅楽「越天楽」である。この曲は、日本音楽の特徴の一つである旋律やリズムの微妙なずれ(すれ)を感得するのに容易な曲である。また、曲名を知らなくとも、その独特な音色はどことなく聴いたことがある生徒が多かった。

～生徒の感想～

強弱がある。#・♭がない。とてもゆっくり。間がすごく空く。

少し暗い。不思議な感じ。単純。始めの4小節と次の4小節では同じ構成。

尺八。波の様。日本の平穏さ。雲・天・地・空間そのもの。

どこかの神社でながれていた気がする。

いきなり音を出し始めている。同じ音を何度も流している感じがする。

似たような音ばかり。

音が繋がっていない。大きい時はゆっくり。小さい時は日本っぽい平穏さが出ている。

また、友だちとのかかわりも大切にして、学習を進めていく。具体的には、各楽器の特徴などは個々に感得し、次に感得したことを意見交換することで友だちの感得したことを知り、自分と比べる。その感得したことを友だちに伝えることによってより自分の感得したことや意見を確信したり、友だちの意見も感得しながら再度鑑賞し合うことによって新たな感得をしたりすると考える。このように個人的な感得を基本に、友だちとかがわり合いながら鑑賞することで、互いのよさを認め合い、刺激し合いながら、より深く思考・判断する経験をすることができると考えた。このような学び合いは、感得し合ったことを実際に表現することで表現力を高めていく中でも大切なことであると考えます。そして、この鑑賞から表現し合うという過程の中で教師がいかに関心を持って生徒の感得した特徴・良さ・違いなどを全体につなげるかによって、生徒の関心を高め、発見し合うような学び合いの場面が見られると考える。

このような課題設定による取り組みで、今後もよりイメージする力(思考力)と他者と合わせていく力(判断力)を実感する子どもの姿を実現するべく、本単元の授業を構想することにした。「鑑賞」による活動により、どの分野でも必要不可欠なイメージ力を培い、その求める音を表現し合うことによって“合わせたい”という意欲が高まっていくと考える。そして、歌唱・器楽・鑑賞・創作において一人ひとりの声質・音色追求の意識を高めていくことを目標に、音の重なりにより生まれてくる音の世界を感じるような活動をさせることにより、より音楽を愛好する気持ちと表現を求める姿が育っていくと考える。

さらに小学校高学年の「鑑賞」で学習している楽曲の構造・特徴や演奏のよさを高めていくことに関連付け、中学でも同じように一貫した「鑑賞」となるよう取り組んでいこうとするものである。

2 展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容(◇印は、学級全体の学び合いの場面)
1	日本音楽をイメージしながら日本音楽の特徴を追求し合おう	1	・雅楽「越天楽」の一部分をききとり、アルトリコーダーで吹く。 ・日本音楽をイメージし合い、ペアで共有し合いながら、日本音楽の特色(音楽を形づくっている要素)をイメージする。 ・日本楽器を一つひとつ聴き、特徴を探る。
2	日本楽器の特徴・音色を追求しよう	2	◇日本音楽をイメージし合い、グループで共有し合いながら、学級全体で日本音楽の特色(音楽を形づくっている要素)を探る。
3	日本音楽を追求し、表現し合おう	3	・音源をもとにアルトリコーダーで吹く。 ◇各グループで日本音楽の特色(音楽を形づくっている要素)に合ったリズムに旋律をのせ、イメージし合った日本音楽を発表し合い、意見交換をしながら気づいたことなどを共有し合う。

※音楽を形づくっている要素＝リズム、旋律、音の重なり・和声、音色(楽器・声)、強弱、速度、構成・形式

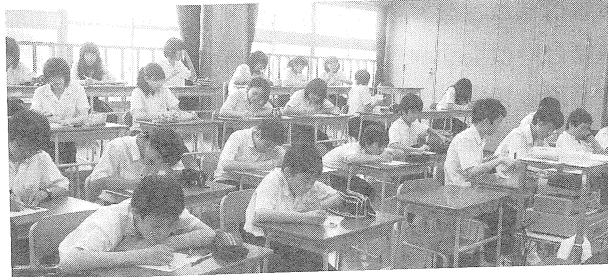
3 授業の実際

(1) 日本音楽の特徴を探ろう

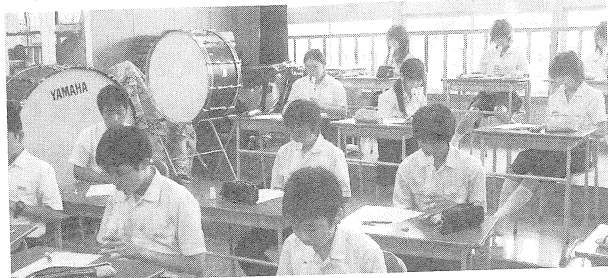
第1次では、雅楽「越天楽」を鑑賞・表現する活動を通して、その音楽の特徴を共有しながら体感する為に、実際に身近な楽器であるアルトリコーダーで「越天楽今様」を吹かせることにした。体感することで鑑賞で感得したことがより感じられたり、友だちとかがわり易く“合わせたい”と考えたからだ。アルトリコーダーで吹く前「越天楽今様」の旋律のききとりから始めた。本校では簡単な旋律をピアノ

で弾いて聴き取り、五線に書き起こすという聴音に取り組んでいる。一音一音、音に集中することによって、また、1回ではなく聴音し易いように何度も弾いているため、何度も聴くことによってこの旋律をよく覚え愛着することをねらいとした。そして実際に吹いてみると、なじみ深い感じではないが、どこかしら聴いたことのある何かひっかかる様な感じで、“あまり動きがない” “ゆったりとした・おだやかな” “音の高さに違いがあまりない” “音程感がない” など不穏な感じはしながらも日本の楽器に興味を示し、特徴を探し始めた。

～聴きとり～

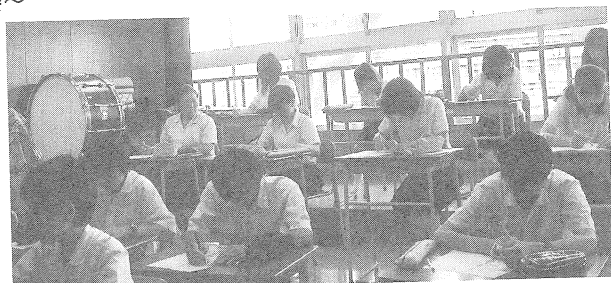
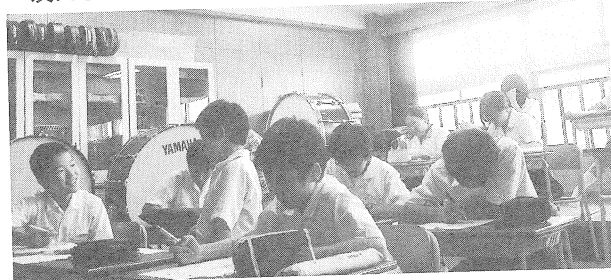


～リコーダー奏～



次にどこの国の音楽であるかを問うと、アジア方面と感じている生徒が多かった。ここから日本音楽への導入となる。『雅楽』の主旋律の聴き取りをおこなったが、その一部分をCDで鑑賞した。沢山の日本の楽器で演奏された合奏であることに注目させ、一つひとつの楽器を聴かせ、日本楽器の絵図と結びつけるというイメージ・雰囲気だけで聴き取らせるという斬新な方法から始めた。初めての日本楽器ではあるが、興味・関心をもって取り組んでいた。

～友だちと意見交換しながら、ワークシートに取り組む姿～



(2) 日本楽器に着目し、日本音楽の特徴などに迫ろう

第2次では、第1次で聴き取った楽器を映像で鑑賞し、楽器の特徴をワークシートに書き込み、そして友だちと意見交換しながら、最後に楽器全部で合わせている「雅楽」の合奏を鑑賞した。

～「雅楽」鑑賞生徒の感想より～

箏や笙の音がよく聞こえた。竜笛も高い音がたくさん聞こえた。終わりの方の楽譜の二人が息がピッタリであった。終わりにパンチがない曲だった。ゆっくりゆっくりとした曲だった。

笙や箏の音がすごく目立つけど、しっかり小さい音たちが支えていて、リズムをとる楽器もあっていいなあと思いました。本当に日本のオーケストラみたいだなあと思いました。楽譜だけのクライマックスの時がきれいでした。

昔っ懐いけれど、それでいて前から知っているような和の曲でした。普段耳にしない音色だからか、とても不思議な感じがしました。

だんだんと音が小さくなったり、大きくなったり波みたい。鉦鼓が音が区切りの時に“カン”ととてもかわいらしい。息がびったり、最初は箏がメロディーで目立っていたが、最後の方は楽譜が目立っていた。

すごく厳かな印象を受けた。外国の音楽の様な派手さがなくて、すごく好印象を受けた。とても表現が難しそうな曲だと思う。

個性的な音が重なりあって格好いい。きれいに合っている。様々な楽器の響きあいすごい。まとまっている。流れがある。そのところで何を表現しているかが知りたい。

音の変わり目や出だしが、あまりはっきりしていないんだと思った。管が常に吹き続けていて、その中に弦が入ったり、打楽器がリズムを刻んでいる感じだったので、少しオーケストラとは違うと思った。

日本楽器一つひとつに特徴などを個々に考察し、書きまとめ、最後に全ての楽器が合わさった合奏を改めて鑑賞することで、一つひとつ丁寧に鑑賞して想像した大合奏がどのような音に聴こえたのか、またはどのように感じ・雰囲気を感じ取ったのか自由な発想を大切に共有し合いたいと考えた。また、よりこの「越天楽」に親しみ、懐かしむことができるよう多くの生徒が小学校時に学習した「越天楽今様」を歌唱し、なんとなく「越天楽」に似ていることにも着目させたいと考え何度も聴く・歌唱する・吹くことを繰り返した。ここで教師は、生徒に飽きさせることなく興味を引くような言葉かけで何度も聴かせることが留意しなければならない。また、曲全体を鑑賞するだけではなく、表現し易い部分を取り上げ、焦点を絞って鑑賞させることで生徒は表現し易くなると考えた。このことは今回取りあげた日本音楽に限らず、全ての教材分野で留意すべきと考える。



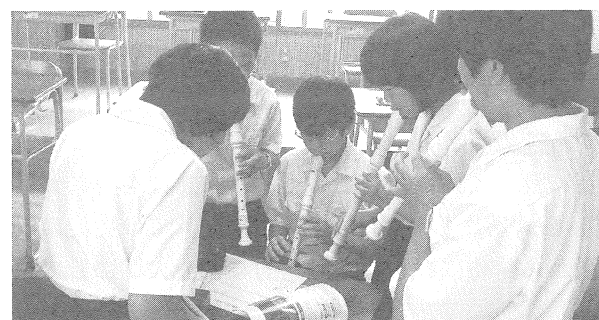
(3) 日本楽器に真似て実際に演奏しながら、日本音楽を表現しよう

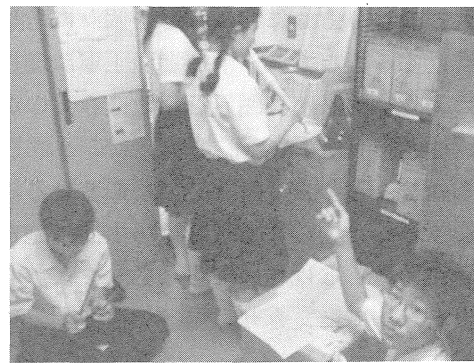
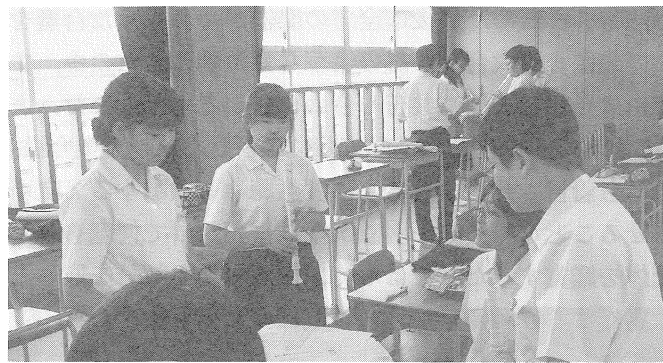
第3次では、鑑賞することによってとらえたことをより明確に感得するために実際に楽器を用いて演奏する。日本楽器そのものを演奏させることは難しいので、グループまたは全体で合わせる事のできる身近な楽器としてアルトリコーダーで演奏させることにした。その際全体で合わせ、日本音楽の特徴である“音楽の間”を感じとらせたい。その際ワークシートの楽譜を目で追わせながら、または板書した楽譜の音符を1音1音追いつながりながら日本音楽の間を感じとらせ、続いてアルトリコーダーで吹くことで、よりその特徴を感得させた。そして、これまで考察してきた各楽器の特徴などを生かしながら、身近なアルトリコーダーでこの題材の旋律(7小節)を演奏する。音色まで追求できれば良いがこれは難しいと考える。まずは自分達でテンポを設定し、絶妙なズレや不規則な速度などを感じ取って演奏すると予想される。その際、その特徴などに近づくよう試行錯誤しながら実践し合う姿を期待したい。どんな速度で奏するのかの目安として近くにメトロノームを準備しておき、速度をより感じ取れるよう、指揮者の役割をする鞆鼓という楽器の代わりとして太鼓を準備し、グループでの日本音楽づくりをさせた。

その際、イメージしたことが音へと発展していく瞬間を大切にしたい。そして、発表という本番めざして表現を工夫したいという意欲を大切にしたい。個々のイメージを持ち寄って調和しながら練習した仲間同士でより自由な発想で辿った音への経緯・工夫を確認し合い、最終練習をしながら今までかかわり合ってきたことが発表できるよう、発表の場を大切なものと位置づけたい。発表し合うことによって、これまでの仲間との表現づくりが“音をつなげる” “人をつなげる” ことへの喜びとさせ、さらには日本音楽を親しむ気持ちが高まるよう期待するものである。

～発表会に向けてのグループ練習～

始めは、どのグループもリーダーを中心に意欲的に練習し始めた。しかし太鼓(鞆鼓)の入るタイミングや、全体で拍子をとることに迷い始めた。これは、何度か日本音楽を音源で聴いて合わせた上で、自分達で合わせることで日本音楽独特な速度感・微妙なズレを感じ始めたと考えた。





また、これまで西洋音楽を多く学習してきた培った規則正しい・軽快な速度を求めるとともに、思わずメトロノームを取り出して合わせるグループが現れた。これは、どう合わせて良いかわからず、日本音楽の“間”への違和感の現れだと思われる。日本音楽の難しさと共に今まで培ってきた西洋音楽との違いを体感することで、そのことをより感じていると思われる。

～発表会～

困惑しながらも各グループで発表会を行った。鞆鼓の奏法による特徴は捉えてはいたが、独特な“間”や“ズレ”を表現することは生徒にとって難しかった。これは、日本音楽への特徴は感じながらも表現することの難しさと古来より続く日本音楽の伝統の深さを感得するにとどまったからだと考える。



～発表会後の生徒の感想より～

とても筆算に似てきたが、本番になるととても緊張したし、メトロノームがなかったのでも難しかった。

楽譜自体は簡単だったが、独特のリズムは難しかった。

鞆鼓があまりリズムをとっているような感じがなかった。

拍をとる目印がなかったので、難しかったけど、逆にそれぞれの班でテンポの工夫が見られて良かった。もう少し工夫を入れれば良かったと思った。

やはり、そう簡単に合わせられるものではないと思いました。

今回、日本音楽の特徴を感じとりながらも表現する難しさを感じた。日本音楽をより知るきっかけとなったと考える。なじみの薄い日本音楽とならないよう、随時取り入れていきたい。

この取り組みが、後にイメージしたこと・ものを音に変えていくような楽器の楽しさ・音づくりの楽しさ、または合わせていくことの楽しさなど「鑑賞」から「表現」につなげていくような意欲へとつながっていくと考える。今後、将来に向けてイメージを音に変えていきたいというような意欲を身につけさせることをめざし、音楽の出会いの場である「鑑賞」を大切にしたい。また、「鑑賞」での生徒の既存にある感性をもとに生徒の観察力、友だちからの刺激から瞬時にひらめく洞察力なども大切にしていこう取り組みをしていきたい。

4 成果と課題

鑑賞は、その音楽の特徴・音色・音素材などを感得したり、情景が思い浮かんできたり（思考⇔判断）と様々ではあるが、鑑賞したことを表現へつなげることを意識すると自ずと曲想や速度などをより感じやすい方向へと向きやすくなった。つまり、感じたことを実際に表現するということである（表現）。また、ペア・グループ・全体へと人とかわり、意見を得るごとに表現しやすくなった。個々で思考・判断してきたことがペアでさらに刺激し合い、グループで表現へとつなげることによってさらに刺激し合い、発表会での全体の共有の場で新たな気づき生まれ、再度グループ活動でふりかえることによって新たな発見が見え出すと感じた。そして、同じ課題で発表し合うことで些細な違いや工夫を感得し合うことができ、音楽のしかけ・特徴なども焦点化して感じ合えることができる。また、同じ課題の中で、途中経過を発表し合う中で、特徴や違いなど伝え合いやすく、同じ課題だからこそ共感しやすいと感じた。ただ、ここでの教師のはたらきかけとして、何度も同じ場面を鑑賞させるのだが、生徒に飽きさせないような言葉かけなどの工夫が必要となってくる。

それに今回の教材は、生徒にとってはあまり生活に密着しておらず、なじみが薄く、初めて学習するかのようという点では、みんなが同じ土俵から学習する新鮮な授業であったと言える。その為、興味・関心は高く、また、習い事などでピアノなどの音楽をしていなくとも率先して取り組むことができる教材だったと言える。

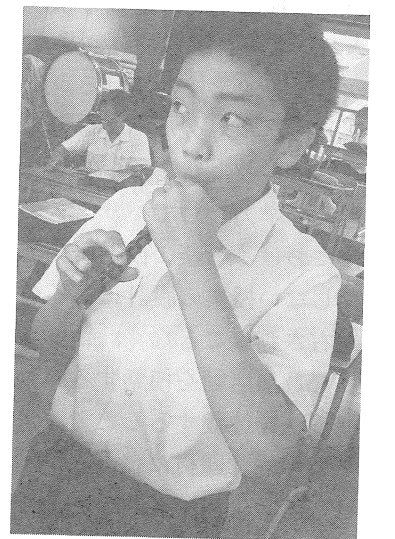
今回、鑑賞活動で生徒同士が学び合う場面として鑑賞したことを実際に表現することでより学び合えると考えたが、実際に表現するとなると表現方法が歌唱またはアルトリコーダーなど限られてきて、教材選定が難しかった。また、歌唱またはアルトリコーダー奏といえども音色・音素材を追求するような高度な要求は難しく、今回取りあげた日本音楽の独特な速度・微妙なズレ（すれ）など表現しやすい音楽的要素に限られてくると感じた。

しかし、今後、鑑賞したことを音に変えていきたいというような意欲は生活していく上で大切なことであり、また何かをイメージしたことを音に変えていきたいというような意欲も大切であると考えます。

今回の実践をもとに、友だちと試行錯誤する姿やその過程を大切にしながら、生涯、鑑賞から表現に向かうような研究を積み重ねていきたい。

最後に、今回の鑑賞から表現へと導くにあたって、生徒の興味・関心を維持しながら、表現へと辿り着いた時、アルトリコーダーではなく本物の日本楽器を見せたところ、直ぐさまに楽器を手にして奏を始めようとする生徒の姿があった。簡単に奏でることのできない楽器ではあったが、この様に興味を示したことは、初めての鑑賞時での感得と鑑賞から表現した過程によって得たその音楽の親しみのようなものと考えます。

今後も、教師が意図的に焦点化し、生徒がより豊かに感じられるよう、音楽の出会いの場である「鑑賞」を大切にしていきたい。



(文責 岩田 佳子)